

「3.11 以降の日本の社会運動に関する考察 ～ソーシャルメディアとデモの関わりから～」

鈴木真蒔

目的：「3.11 以降の社会運動」とは何だったのか、それを現在において記録し、問うこと

第1章 「社会運動の社会学」と従来の社会運動に対する理解

「社会運動の社会学」で議論されてきた「社会運動」の捉え方・アプローチなどを整理した。そして、戦後日本における社会運動の具体的な展開を、主要な例（労働組合、原水爆禁止運動、安保闘争、「68年」の学生運動）に絞って追ってきた。60年代初頭までの運動は「共同体」単位の参加が多く、「共同体」の縛りが緩み「自由参加」が増えるのは、60年代後半以降からであった。しかし日本の場合、1960年代を境に「抗議するタイプ」の大規模な運動は減少していき、70年代～80年代は社会運動が最も衰退した時期であった。そうしたことから、「社会運動の終焉」が嘆かれるようになったが、「終焉」という「幻想」の背景には、研究者側が「たたかひの政治」（敵手との対決）の観点からのみ運動を捉えているという限界が指摘される。

第2章 2011年以降の社会運動の再興

「終焉」の議論の中、日本では約40年ぶりに大規模な社会運動が「反原発デモ」という形で起こった。この2011年は世界各地で連鎖的に社会運動が発生した年でもあり、中東アラブ諸国における「アラブの春」、スペインで「反格差」を訴える「インディグナードス運動」、「私たちは99%だ」と唱えるアメリカの「オキュパイ・ウォールストリート」などが注目を浴びた。

2011年以降の社会運動に共通する点として、①広場が占拠され、②そこでお祭り騒ぎやサウンドデモといった祝祭空間がつくられ、③特定の指導者を持たない水平的な組織のもと、民主的な合意の手法が採用され、④ソーシャルメディアが運動のあらゆる局面で活用され、⑤運動の主な担い手には、学生・知的労働者・都市部のサービス業に就く「認知的プレカリアート」が多いことなどが指摘される。日本でも「素人の乱」や「首都圏反原発連合」など、世界の潮流と共通する運動も見られるが、そこでは「学生」や「大企業正社員」の存在が欠けているという特徴も見られた。

第3章 ソーシャルメディアと政治

「2011年以降の社会運動」の多くに共通した特徴である、「ソーシャルメディア」について見てきた。誰もが情報の「発信者」や「作り手」となることを可能としたソーシャルメディアの普及は、情報の発信を独占してきたマスメディアの存在を相対化し、個人が発する情報がときに公的な空間に流れるようなメディア環境をつくったとされる。こうした環境のもと、ソーシャルメディアは社会運動への人々の参加を促す「動員」の手段として活用され、実際に大きな成果を上げてきたという調査結果も存在する。

第4章 社会運動の「メッセージ性」と「潜在性」に関する考察

～メルッチの社会運動論と伊藤の『デモのメディア論』より～

しかし、ソーシャルメディア＝デモの動員の手段とする見方に対しては批判的な意見もあり、本論文が目した伊藤昌亮の議論（2012）もその一つである。伊藤は、アルベルト・メルッチの議論（1989）を下敷きに論を展開し、この二人の議論を土台に展開したのが次の第5章である。

メルッチは、**(A)**社会運動を、政治システムとの関係における「道具的」な存在としてではなく、運動それ自体の中に目指すべき社会像・組織像が実践されているという「メッセージとしての運動」の観点から見る。そして、**(B)**社会運動を「可視性」（デモや抗議行動）と「潜在性」（意味のネットワーク）の二つの局面として捉えている。

伊藤は、このメルッチの議論に基づき、**(A)**2011年以降の社会運動とは、一見すると「抗議する運動」だが、そこで実践される「お祭り」や「キャンプ」という装置を通じた（目指すべき）「社会をつくる運動」でもあると指摘する。「社会をつくる」という試みの背景には、90年代以降のグローバル化の影響に伴う「社会の不安定化・崩壊」があるという。**(B)**しかし、これは運動の可視性の局面に過ぎず、現代の運動はその水面下で、新しい意味を生み出すことで抵抗のポテンシャルが用意されるという「意味のネットワーク」がソーシャルメディア上で展開されていると述べる。つまり、デモとは社会運動における氷山の一角に過ぎず、現代における社会運動の本質部分とは日常的なソーシャルメディア上のコミュニケーションだとする見方を提示した。

第5章 SEALDsに代表される3.11以降の社会運動と個々人の関わり方

～デモとソーシャルメディアを中心に～

伊藤とメルッチの議論をもとに、SEALDsメンバーなどへのインタビューデータや一次資料を用いて展開したのが第5章である。**(A)**「メッセージとしての運動」の観点からは、SEALDsメンバーの多くに「3.11」という共通体験（社会が終わっている感覚）があり、彼らは「終わった社会」を目の前にして、自ら「始めるしかない」と述べる。それが体現されるのが、①ヒップホップを流したサウンドデモ、②「私」を主語とするスピーチに表される「個人」の尊重（メンバー全員がSEALDsを代表）、③「個の尊重」を可能とする組織的柔軟性などである。こうした従来の組織や支配的価値とは異なるあり方を実践してしまうために、SEALDsの運動それ自体が「メッセージ・記号」になっていると言える。

(B)「意味のネットワーク」の観点からは、①デモに並ぶ重要な行為としてTwitter上での発信が位置づけられている点、②デモに参加する意味をソーシャルメディア上で問いながら参加している点、③そうした発信が「日常」のありふれた投稿と同列に行われている点が確認できた。

(C)さらにSEALDsの矢野和葉・矢部真太・内藤翔太へのインタビューからは、「メディアとしての運動」という特徴も見られた。SEALDsなどが実践するデモが、国会前だけではなく、ソーシャルメディアを通じて、その場にはいない「個人」へと「問い」を投げ、その「他者」からの「応答」を期待する「ソーシャルメディア・ムーブメント」という性格を持つと結論づけた。

「3.11以降の社会運動」とは何だったのか

論文全体を通じて浮き彫りになった 5つのポイント

- ① 何かしらの「共同体」に属しているから参加するのではなく、その内側に多様な「個人」を流動的に含むことで成り立つのが現代の運動だという点。
- ② グローバル化や震災を背景とした不安定化・不透明化する社会に突入する中、ある意味そうした絶望的な状況を乗り越える知恵として、運動が「自己否定的」で「つらいもの」ではなく、「祝祭性」や「楽しむこと」を重視している点。
- ③ 3.11 や 2011 年以降の日本及び世界の社会運動が、そこで実践される組織や運動の「異質性」(新しさ) ゆえに、なかなか 20 世紀型の既存の政治システムに影響を与えられない点。
- ④ 社会運動はデモという「抗議」や「たたかい」的な要素だけではなく、特にソーシャルメディア上において新しい意味を生み出すことで成り立ち、またソーシャルメディアを通じて「個人」から「個人」へと向けられた「メディアとしての運動」(ソーシャルメディア・ムーブメント) という性格を持っている点。
- ⑤ 本論が「3.11 以降の(日本の)社会運動」について考察すると同時に、そこでは日本の社会運動が同時代の世界の社会運動を相互参照する中から生み出されていることから、「2011 年以降の世界の社会運動」の一部でもあるという性格を持っている点。

[主要参考文献]

[第1章]

- ・ 大畑裕嗣・成 元哲・道場親信・樋口直人 [編] 2004 年『社会運動の社会学』有斐閣
- ・ 小熊英二 2012 年『社会を変えるには』講談社
- ・ 長谷川公一・町村敬志 2004 年「社会運動と社会運動論の現在」、曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人 [編]『社会運動という公共空間—理論と方法のフロンティア—』成文堂
- ・ Tarrow, Sidney, 1998, *Power in Movement : Social Movement and Contentious Politics*, Second ed., Cambridge : Cambridge University Press. (= 2006, 大畑裕嗣 [監訳]『社会運動の力—集合行為の比較社会学』彩流社.)

[第2章]

- ・ 小熊英二 2013 年「盲点をさぐりあてた試行—3.11 以後の諸運動の通史と分析」、小熊英二[編]『原発を止める人々—3・11 から官邸前まで』文藝春秋
- ・ 小熊英二 2016 年「波が寄せれば岩は沈む—福島原発事故後における社会運動の社会学的分析」、『現代思想 特集 3.11 以後の社会運動—交差する人々』青土社
- ・ 五野井郁夫 2012 年『「デモ」とは何か—変貌する直接民主主義—』NHK 出版
- ・ 町村敬志・佐藤圭一 [編] 2016 年『脱原発をめざす市民活動 : 3・11 社会運動の社会学』新曜社

[第3章]

- ・ 遠藤薫 2016 年『ソーシャルメディアと〈世論〉形成—間メディア社会が世界を揺るがす』東京電機大学出版局
- ・ 津田大介 2012 年『動員の革命—ソーシャルメディアは何を変えたか』中央公論新社
- ・ 平林祐子 2013 年「何が「デモのある社会」をつくるのか—ポスト 3.11 のアクティヴィズムとメディア—」、田中重好・船橋晴俊・正村俊之 [編]『東日本大震災と社会学—大災害を生み出した社会—』ミネルヴァ書房

[第4章]

- ・ 伊藤昌亮 2012 年『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ—』筑摩書房
- ・ Melucci, Alberto, 1989, *Nomads of the Present : Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society* : Hutchinson Radius (=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かずみ [訳]『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店)

[第5章]

- ・ 高橋源一郎・SEALDs 2015 年『民主主義ってなんだ?』河出書房新社
- ・ 田村貴紀・田村大有 2016 年『路上の身体・ネットの情動—3.11 後の新しい社会運動: 反原発、反差別、そして SEALDs へ』青灯社
- ・ SEALDs [編] 2015 年『民主主義ってこれだ!』大月書店
- ・ SEALDs 2016 年『民主主義は止まらない』河出書房新社